

ポパー 3 世界説再考

二瓶 真理子 (Mariko Nihei)

東北大学文学研究科博士課程

1960年代以降カール・ポパーは、心身相互作用説、非決定論、進化論的認識論など形而上学色の強いトピックに傾倒していくようになるが、これらを語るさいの枠組みとして使用されているのが「3世界説」である。

3世界説によると、我々が現にかかわっているこの世界は、世界1 (物理的対象・現象など)、世界2 (意識、命題的態度など)、世界3 (客観的知識、信念内容、理論、人工物、芸術作品、慣習その他) という少なくとも3つの互いに還元できない領域に区分される。そして、ポパー自身の言葉に従えば、各世界間には「相互作用」ないし「フィードバック」があり、世界3は他の世界とは独立の「自律性」を持つ。しかしながら周知のとおり、3世界説は強固な多元的存在論として定式化されているわけではなく、各領域とその関係にはあいまいな点も多い。3世界説は、ポパー自身によっても「メタファーのようなもの」と言われるとおり、常識的实在論ないしなんらかの非還元的物理主義のなかで3つの領域について語るという域を超え出るものとはいえない。むしろ、3世界説にとって重要であるのは、「人間によって作られたものとしての知識」という知識観と、そのような知識に対しての「認識主体なき認識論」という側面であろう。認識論を、知識対象と認識主体の信念との関係についての探究から、知識そのものの探究方法へとシフトさせるという論点は、初期ポパーの中心的主張のひとつであった。

本発表では、まず初期ポパーの方法論的思想と3世界説との連続性について確認する。その後3世界説における客観的知識と主観的信念との区別、および3世界説の「客観性」概念を整理・検討する。3世界説において「客観性」概念は揺れがあり、言語によって公表されているという意味、知識探究者の共同体によって間主観的に受容されているという意味、理論や人工物がその作り手によっては意図しない帰結を潜在的にもつという意味、プロセスではなくプロダクトであるという意味、人間の認識からはまったく独立であるという意味、といったように様々な意味で使用されている。(これは、3世界説には「知識は人間の産物である」ということと、「人工物が知識探究の対象になる」ことが同時に含まれており、かつ、そのことにポパーは意識的でないということにもよる。) 本発表では、ポパーの言語機能説および言語的共同体による「プラスチック・コントロール」という概念を明らかにすることによって、言語共同体が世界3の対象に間主観的に与える客観性 (方法に起因する客観性) と、世界1的对象の実在性に起因する客観性 (ものに起因する客観性) とを区別する。さいごに現代の科学論との関連性にも言及しつつ、3世界説を我々の知識探究を説明するための概念装置ないし方法論として理解する可能性について検討したい。